

銀行資金發達概觀

飯田 靜次郎

一

銀行資金は經濟社會の發達の程度及銀行の種類により異なる。夫の信用の利用幼稚なる時代に於ては交換の媒介、支拂の方便は、主として正貨なるを以て、銀行資金も正貨に存するものなるが、信用漸次發達せる時代に於ては、種々の信用形式創設せられ、正貨の代用をなすを以て、銀行資金も自然變化し、信用形式は主要なる銀行資金を占むるに至るべし。而して其信用形式の内銀行の創設による重なるものを、銀行券及振替預金の二なりとし、共に其額支拂準備として貯へらるゝ正貨に超過するものとす。然れば普通の商業銀行に於ては、資本金及積立金は重要な運用資金を占むるものにあらず。夫のリカード氏が「銀行家たる職能は、他人の資金を運用するに至つて現る」と云ひ、又バヂェオット氏の之に

唱和して、自己の資金を用ふる間は單に資本家たるに止る」(Walter Bagehot, Lombard Street, ch. II. p. 21) と云へるは、銀行の本質を能く喝破せるものとす。即商業銀行は其性質上自己固有の資本金により、經營せらるべきものにあらずして、預金其他の形式にて公衆より收受したる資金により、經營せらるべきものなり。然して銀行が資本金を有するは、之を運用せんが爲にあらずして、單に信用を得んが爲に外ならず。蓋し自ら資本金を有し、銀行と取引せんと望む者に安心の念を惹起せざる可からず。又銀行業は常に正當なる營業方針を立て、何等の過失なく分毫の損失を生ぜずと云ふ可からず。金融市場の状態は實に變轉極りなく、經濟界の景況は屢々動亂し、銀行は不圖營業方針を誤用し、之が爲め困難に遭遇して、大なる損失を受け債權者の利益を害すること、絶無なりと云ふ可からず。若し斯る際に銀行が、唯受けたる信用を有するのみにして、何等自己固有の資源を有せざる時は、銀行の損害は直に債權者の損失となり、債權者の不安之れに過ぐるはなし。茲に於て銀行は自己の資本金を具へ、例令銀行が損失を被ることあるも、或程度迄其資本金を以て之を償ひ、債權者に損害を及ぼさしめ、以て債權者の不安を除き、信用を得ざる可からず。然れば銀行の資本金は、銀行

に信用を與ふる債權者に對し、銀行債務の保證なりと稱することを得べし。然しながら銀行も他の營業と同じく、自己の資本金なくして業を開始し得べきに非ず、亦繼續すること能はず。是れ現時に於ても銀行の看板を掲ぐるや、預金續々流入し、割引貸付の顧客之に踵で來るが如きは、殆望むこと能はざる所にして、銀行は先づ自己の資本金を以て、前引貸付を行ひつゝある間に、預金漸次に集來するものとす。然れば資本金なるものは銀行創業の當時に於ては勿論、預金の未だ發達せざる時期に於ては、營業資金として必要なりとす。然るに日月の經過に従ひ預金流入して、徐に其額増加するに於ては、銀行は次第に其本能を發揮し、公衆の資金を以て、其業務を經營するに至り、自己の資本金は是等の預金、即債務に對する保證資金たる性質を具有するに至るは、銀行券發行の場合即發券銀行に於ても、又預金銀行に於ても然りとす。其信用形態の發達するに従ひ、如何にして資本金は、營業資金たる性質次第に減退し、債務に對する保證資金たる性質を帯びるに至りしや、是茲に發達の跡を探り、以て其趨勢を窺はんと欲す。

按ずるに往時信用並に銀行業の幼稚なる時代に於ては、銀行は主として其資本金を以て營業を爲したるものなれば、金融上大なる活躍をなさんと欲するも、其目的を達すること能はず。是れ往時銀行券の發行は普通銀行に缺くべからざる重要な業務なりしは、當時銀行問題と稱すれば銀行券發行問題にして、現今の預金事務發達は、實に銀行券の行使により信用の進歩を促したる賜にして、其效重且大なりと謂はざるべからず。

貨幣發達の幼稚なる時代には、品位粗惡にして且毀損せる金屬貨幣の發行せられ、之が爲一般世人は行使上不安の念に驅られたのみならず、又實際多くの損失を受けしが如く、彼の銀行業發達の初期には充分に正貨準備をなさず、又兌換の能力を有せずして、銀行券を發行したるもの多額に達し、之が爲社會に大なる害毒を流布したり。蓋銀行券の發生は現今の如き銀行業、換言すれば信用結出機關としての銀行業、發達の階級に一步進めたるは疑はざる所なり。

彼の英國に於て銀行券の未だ世に流通せざる時代、當時存在したる所謂銀行

は、主として金匠又は地金匠にして、華主の一方より正貨を受け、之を他方に貸付け又は手形割引の依頼に應じたりしが、手形を以て貸出をなす方法行はるゝに至り、貴金屬の節約となり信用機關は圓滑に運轉するに至りたり。然しながら當時金匠により發行せられたる手形は、元來預託したる金屬の領收書なりしが、後に一定の金屬を支拂ふ所の證券と認められ、通貨として流通するに至り、其後彼等の内巧妙なる者は單に金屬を預入れたるものに對して手形を渡すのみならず、更に正貨の借入に來りし者へも之を渡すことを案出したり。此事實は近世銀行業の起因、且基礎を占むるものなり。

抑銀行業に於て世人より正貨又は地金銀を保管し、之を一般公衆に貸付くる時は商業社會は便宜を受くるも、其効用は少し。此際銀行は正貨を使用せず、正貨支拂を諾せる一葉の證券を以て行ひ、同銀行の信用に疑を生ぜざらしむる時は、其證券は直に支拂請求の爲提示せられざるを以て、同様の證券を第二第三第四の人々に融通することを得。此方法により商業界と銀行は相互に債務を負ふ手段により取引を決済するにあり。今此相互債務の理を明瞭ならしめんが爲次に例を擧げて説明せんと欲す。

往時英國に於て銀行券の前身たる手形を發行したる地金匠を原始的銀行と假定し、同銀行は甲より一萬磅の正貨を預り、之を乙へ貸付けたりとせば、貸借對照表は次の如し。(簡易ならしめんが爲め資本勘定を略す)

甲	より	借	£ 10,000	乙	へ	貸	£ 10,000
---	----	---	----------	---	---	---	----------

然るに此銀行の信用確實なること承認せられ、乙は正貨の代りに手形を以て受取るを諾するに至れば、貸借對照表は次の如く變化す。

甲	より	借	£ 10,000	現金手許有高	£ 10,000	
未拂手形	〃	10,000	乙	へ	貸	〃 10,000
		£ 20,000				£ 20,000

右の如く乙は手形を以て借用したる故、甲より預りたる正貨は銀行の手許に残留し、乙へ貸付の爲與へたる手形は銀行の正貨を渡すべき債務を表するものなる故、銀行の支拂約束なり。之が爲乙は銀行への貸となり如此にして乙と銀行とは相互に債務を負ふに至りたり。而して乙の銀行より受けたる手形は速に正貨と引換の爲提示することなく、未拂の儘にて商業社會に轉帳流通するを知る時は銀行は更に丙丁戊等と同様の方法にて貸與することを得る故、貸借對

照表は次の如く表示することを得。

甲より借	£ 10,000	現金手許有金	£ 10,000
未拂手形	£ 40,000	華主へ貸	£ 40,000
	£ 50,000		£ 50,000

是れ相互債務に基く通貨の理論にして、如此漸次擴張することを得。即銀行は要求拂の約束により四萬磅の負債を受け、華主も同額の債務を負ふに至りたり、其四萬磅が轉帳流通して商業の振興を圖り又貿易を隆盛ならしむべし。若し此際正貨のみを以て轉帳流通せしめんと欲せば、社會は新に鑛山を採掘し、又は外國に貨物を輸出し、四萬磅の正貨を獲得せざる可からず、此犠牲たるや決して小なりと云ふこと能はざるべし。アダムスミス氏曰く「金銀貨幣は恰も普通の道路の如し、秣草及穀物を市場に運搬するには、大なる便益を與ふれども、自ら其土地には一粒をも生ずることなし、然るに銀行の巧妙なる作用により銀行券を發行し、正貨の用を省略するに至れば、猶一種の車道を空中に架設したると等しく、道路の大部分を牧場又は耕地に變ずるを得、大に其國の土地及勞力の生産額を増加せしむべし」と (Adam Smith, The Wealth of Nations, Book II, ch. II.) 蓋し適

切なる譬喩と云ふべし。然るに此際注意を要すべきは銀行の負債總額は五萬磅の多額に達せる要求拂債務に對し、所有する正貨は僅に一萬磅に過ぎざるにあり。此割合も金融市場平穩なる際には安全なる比例と認めらるゝならんも、若し此際正貨準備高を比例して増加せず、唯手形發行高のみ増加するときは、不測の事件に際し不時の取付に遭ひ、支拂停止の悲運に陥ることあるべし。史に徴するに往時銀行業の幼稚なる時代、此の如き災厄に遭遇せし例に乏しからず、彼の英國に於て之が爲銀行券發行銀行の數を大に減せしめたるのみならず、正貨の金額準備を有するにあらざれば一葉の銀行券をも發行すること能はずと唱へ、銀行券を以て單に地金證券たらしむべしと極論するもの現はれたるを以ても了解することを得。例へば往時英蘭銀行は營業狀態不良の爲銀行條例調査委員會設置となり、夫の千八百四十四年の改正銀行條例發布となり、同行は以後千四百萬磅を限り保證準備發行を許容せられ以上に發行額を増加せんと欲せば、必ず同額の正貨を準備するを要すと規定せられたり。

元來銀行券の要は正貨を節約して、銀行の庫中に殘存する正貨の効用を増加せしむるにあり。然るに往時の銀行業者は銀行券の發行に際し、適當なる正貨

準備を保有する必要と、資産の殘高を可成流動性のものとなすの必要を充分に自覺せず、兎角亂用に失し諸種の不幸及害毒を惹起せし故遂に激烈なる反動を起して銀行券による正貨の節約を阻害し、英蘭銀行の如き一定額以上の發行には必ず同額の正貨準備を要すと規定せらるゝに至りたるなり。而して銀行券の價值は即時に正貨と兌換せられ、且諸種の支拂に之を用ひ、何人も拒絕することなきによる。然れば銀行の創出する信用の限度は、銀行が其要求に應せんが爲に保有する正貨の數量に因り定る。(Hartley Withers, The Meaning of Money ch. III)

三

前述の如き理由により、銀行券の發行は往時の普通銀行に於ては重要な業務なりしが、之が因となり信用形式の發展となり、就中預金の發達を促し、現今に於て銀行券の發行は、少數の特權銀行の獨占となり、普通銀行は之に資金を求むるを要せざるに至れり。蓋し商業銀行は自己の信用を利用して、帳簿上の振替により成立せしむる預金を出現せしむるに至りたればなり。思ふに銀行の最

主要なる職分は一般公衆より預金として零碎なる遊金を收受し、之を資金として割引貸付の方法により運用するにありと、一般に信ぜらるゝも此零碎なる遊金は悉く現金なりと解するは、正當なる見解にあらず。實に此種銀行に於て現金の拂込による預金は、營業資金の一部分を占むるに過ぎずして、普通運轉資金に充當せらるゝ場合少く、主として支拂準備に充てらるゝにあり。然らば其預金とは如何と云ふに、銀行が自己の信用を利用して、帳簿上の振替により成立せしむる創設預金即銀行自身が出現を圖る預金通貨を包含するにあり。是れ商業銀行の主要なる資金なり。而して預金通貨とは支拂用具として觀たる當座預金の意にして、小切手の使用により商業上支拂用具即通貨として其任務を盡すものなり。然らば預金通貨の發生如何是れ全く銀行券に於けるが如く、相互債務に依つて成立す。今例を設け預金通貨造出の原理を説明せん。

茲に創業の準備を終り新に開業せる銀行あり。甲より現金にて壹萬圓の預金を受入れたりと假定し、乙へ壹萬圓の貸出をなさんとするに當り、甲より預りたる現金を乙に貸付くるに於ては、甲は銀行に貸し銀行は乙に貸付けたるに止り、相互に債務を成立せしめず、然るに甲より預りたる現金は銀行の金庫に止め、

乙に對しては單に帳簿上の債權を許し、其金額は直に當座預金に振替ふる方法を採るときは、銀行は乙の當座預金に對し何時にても壹萬圓を支拂ふべき債務を負ひ、乙は借用約定により銀行に向つて期日に壹萬圓を返済すべき債務を負ひ、此相互債務により壹萬圓の預金通貨は新に造出せられたり。而して當座預金は何時にても小切手にて支拂の用に供することを得るを以て、乙は必ずしも此資金を現金にて借受くる必要なく、預金に振替へるを便とすべし。斯くして銀行は更に丙丁戊に對しても割引貸付の方法により各壹萬圓を貸出し、何れも同様當座預金に振替ふる時は相互債務により新に四萬圓の預金通貨が出現せしむ。茲に於て銀行は乙丙丁戊に對し期限に應じ總額四萬圓の返済を受くる債權を獲得し、同時に乙丙丁戊は何時に於ても總額四萬圓を限度とし請求し得べき債權を得。此相互的債權又は相互的債務により、新に四萬圓の預金通貨は出現したり。而して銀行は甲より預りたる現金壹萬圓を以て甲乙丙丁戊の預金總額五萬圓の支拂準備に充當す。此の如くにして預金通貨が出現する時は甲乙丙丁戊間に於ける受授は毫も現金によらず、小切手を用ひ預金を振替ふることにより決濟することを得。而して決濟後に於ても相互債務に基く預金通

貨の總額は増減せず、唯甲乙丙丁戊各自の預金高が増減し、相互債務の意味は少しく變化して銀行と顧客間に限らず、全體として見たる顧客と銀行との相互債務關係となるに止る。

今此預金通貨を銀行券發行の場合に比するに、共に相互債務に基礎を示し、唯異なる點は銀行券に對する支拂準備金は正貨たるを要するに、預金の場合には法貨なれば正貨にても銀行券にても共に其の責を充たす點にあり。マクラウド氏曰く「預金と銀行券とは一にして二に非ず、銀行を大別して預金銀行及發券銀行と分つは根本的に誤れり、總ての銀行は發券銀行なり」(Henry Dunning Macleod, *the Theory and Practice of Banking* 6th. ed. Vol. 1. pp. 326-330)又ラフリン氏曰く「預金は銀行券と同一效力を有す或點に於ては銀行券より一層效力の大なる通貨を造出す」(Laughlin, *The Principles of Money*. p. 118)以て預金と銀行券とは異形同質たるを知ることを得。只通貨職分上より見れば預金通貨と銀行券との間に於て、強て異點を擧ぐれば預金通貨は特殊的支拂用具なるに、銀行券は一般的支拂用具たるに過ぎず。前者は受取る者の同意を得て流通する通貨なるが、後者は本位貨幣と同じく、受取る者の同意を要せざる點にあり。然らば預金通貨造出

の限度は如何是れ次に論述せんと欲す。

凡そ當座預金は支拂請求のある時は、何時にても之に應すべき準備金を要す。然れば此準備金が預金額に對し一定割合以下に降るときは社會公衆は不安を感じ、銀行は支拂停止の悲運に陥ることあり。茲に於て預金通貨の額は支拂準備に充てらるゝ法貨の額により制限せらる。此準備金は死藏せらるべき資金なれば、少額なるを得策とすべし。然しながら其額少きに過ぐれば財界危急の際、一時に取付に遭ひ破綻を招く憂あり。多きに過ぐれば死藏せらるゝを以て不利益なり。此點に就き學者種々の説を爲し、或は預金額の四分の一以上又は三分の一以上たるべしと云ふ者あるも、之は膠柱の論にして決して鑄型主義により律することを得ず。全然銀行經營者の觀察及判斷に委すべきものなり。之れ銀行家に一任せば自ら其時及其場所に應じ、適當なる支拂準備の割合を保つこととなり、自然預金通貨を制限するに至るべし。

四

按ずるに銀行業に於て銀行券の發行と預金とは性質同一にして、只形態上に

於て異なり、共に銀行に對し要求拂債權なり、故に之に對し支拂の要求に應ずべき準備金を要し、寸毫の差異を認めず。然るに預金を主とする預金銀行は、如何にして銀行券の發行を主とする發券銀行の跡を逐ふて發達するに至りしや、是れ茲に兩者の關係を探り以て、其發達趨勢を窺はんと欲す。

抑預金銀行は骨子として社會多數の人士が、同時に少數の銀行又は一銀行を信認し、之等に金錢又は金錢債權を預託するにより、營業資金を獲得するにあり。然しながら多數の人々をして同時に同一の銀行に向はしむるは困難なるが、殊に信用の發達せざる時代、世人は自己の金錢其他の財貨を視界外に放ち、且何等の擔保物を受けず、之を他人に預託するが如きは行はるべきにあらず。然らば世人が銀行を信認し其便宜を覺り、之を利用せんと欲せざる時代に於ては銀行は社會公衆より零細の資金を蒐集し、之を基礎として銀行業を經營せんと欲するも能はざる所なり。而して前述の如く一銀行に多額の預金を集むるは、多數人の協同行爲を要し、他人の好意によらざる可からず、之れ容易の業にあらず。之に反して銀行券の發行は自己の意思を以て多數の人に之を以て貸出し、日常の取引に於て正貨引換を請求せざれば自ら流通するものなり。然るに預金は

銀行自ら之を始めること能はず、世人の自然に且間斷なく之を利用するに至るを待たざる可からず。換言すれば銀行券の發行は自動的作用に屬するも、預金の受入は受動的作用に屬し、公衆よりの資金を待たざる可からず。然るに銀行券は資金の需要に對し之を發行し、預金を融通すると同一の作用を行ふ、只兩者異なる所は預金は豫め社會公衆預金主に對し債務を負ひ、之を貸出し借主に債權を創設するに、銀行券を發行する場合は借主に對し債權を設定すると同時に公衆（銀行券流通によりての所持人）に債務を負ふものなり。此の如く預金の吸收には困難なる事實あり、銀行券の發行は容易なるを以て、銀行券は預金に先だつて銀行の貸出資金を構成したり。又預金の發達には要件として社會の經濟的發達充分に高度に達し、資金豊富なること及信用證券の利用に一般世人は熟達し、銀行業の健全なる發達等を前提とすれば、一國の經濟的發達遅々として進まず國富豊ならざる貧弱の國民に對し、預金の發達を望むべからざるや必せり。然らば此際資金の需要に當り貴金屬貨幣を鑄造せんと欲せば、獲得上資本及勞力を要し又貴金屬を貨幣として用ふる場合に於ける種々の費用及不便を生じ、到底貧弱國の耐ゆべき所にあらず。然らば健全なる營業の下に銀行券を發行

し、之を使用する時は其流通額と正貨準備との差額に相當する貸出資金を増加するを以て世の金融之が爲疏通し、生産を盛ならしめ商工業を振興せしめ又貿易を隆盛ならしむべし。

之を史に徴するに往時の銀行は公衆と關係すること甚だ稀にして、英國に於ても最初は銀行業の組織及業務を理解するもの甚だ少く、自己の貨幣を委託する唯一の信用を銀行に委ぬるもの極めて稀なりしが、銀行券の發行せられ社會に普及するや、元來銀行券の價格は銀行の引換能力に存するを以て之を信認して多額の銀行券を所有するに至り、之に對し何等の利益を收得せず、且恰も正貨を貯藏するが如く紛失盜難の危險を感ずべし。然らば若し之を銀行へ預託する時は該銀行にして倒産せざるに於ては何等の損害を受けず、又正貨を手許に所有する際生すべき種々の災厄より脱することを得るの理由を覺知し、漸次預金の念を生ずるに至るべし。然しながら此單純なる理由も信用の發達せざる時代に於て、直に了解せらるゝことは至難の事實なれば、銀行券の發行せられ流通するに及び徐に銀行信用を社會に公告し、時日の經過に従ひ此單純なる理由は社會公衆に認識せられ、正貨も銀行券も預託せらるゝに至るべし。茲に於て

銀行券により預金の制を社會に普及せしむる效果は、發券銀行分布の度に應ずるものにして、信用發達せず銀行業の發達幼稚なる時代に於ては、發行權を一銀行に獨占せしむるが如きは、銀行業を普及し預金の制度を樹立するに困難多く、且發達遅々たるものなれば公益の許す範圍に於て、發券銀行分立の制度に従ひ預金其他一般銀行業の發達を促し、預金銀行の出現を圖ること緊要なるべし。

バジオット氏曰く

“A system of note issues is therefore the best introduction to a large system of deposit banking. As yet, historically, it is the only introduction: no nation as yet has arrived at a great system of deposit banking without going first through the preliminary stage of note issue.” (Walter Bagehot, Lombard Street, pp. 91-92) 寔に吾人の意を得たり。

此の如き理由により銀行券の發行は銀行業の初期に於て特に重要な業務にして、預金事務發達の階梯となり、信用進歩の導火線となりしものにして、預金の發達は銀行券の行使に負ふ所大なりとす。實にルロア・ポリュー氏の云へるが如く、銀行券の發行は社會公衆の人士をして銀行を利用せしむるに有力なるものにして、公衆は之が流通より自然に銀行を信用し、支拂取立等の事務に至る

迄銀行を利用するに至りしものなり。而して預金發達し殊に商工業者の主として銀行を利用するに至れば、銀行は其預金を基とし割引貸付を行ひ、其手取金を預金に振替へ、之に對し小切手を振出さしむるを以て、社會の資金は益々増殖し、金融は從て圓滑となり信用愈々發達するに至るべし。

五

次に前述したる實例として現今世界中最預金の發達せる英米の二國に於て、銀行券と預金との消長の跡を窺はん。

英國の狀態を觀るに現今預金銀行の最も普及せるは、蘇格蘭なり。然れども往時同國に於ける銀行業の利益は、全く其發行せる銀行券に基くものなりしが、其後債務の一小部分を占むるに過ぎず。夫の蘇格蘭「ローヤルバンク」と合同せる「セバンク、オフ、ダンデー」は千七百六十三年に創立せられ、其合同以前既に巨額の預金を有したりしが、創立後二十五年間は預金皆無にして、主として銀行券を發行し送金事務を行ひたり。然して約三十年を経過せる千七百九十三年に至り、漸く預金を得るに至り以來長足の増加をなしたること次の如し。

年 度

銀行發發行額

預 金 額

一七六四	三〇、三九五磅	
一七七四	二七、六七〇	
一七八四	五六、三四二	
一七九四	五〇、二五四	四八、八〇九磅
一八〇四	五四、〇九六	一五七、八二一
一八一四	四六、六二七	四四五、〇六六
一八二四	二九、六七五	三四三、九四八
一八三四	二六、四六七	五六三、二〇二
一八四四	二七、五〇四	五三五、二五三
一八五四	四〇、七七四	七〇五、二二二
一八六四	四一、一一八	六八四、八九八

(Walter Bagehot, Lombard Street, pp. 86-87)

英蘭に於ける銀行史は、其材料に乏しく其詳細を知り難きも又同一なりしや疑ふ可からず。夫の千八百三十年頃迄は銀行收益の主たる源泉は銀行券より生じたるものにして、一般に英蘭銀行以外の株式組織銀行は充分に英國の法律に於て優遇せられず。其後千八百五十七年に至るも尙英蘭銀行總裁は倫敦に於ける株式組織の銀行が、資本金の總額三百萬磅にして、準備金は僅に二百萬磅

を有するに過ぎざりしに、三千萬磅の預金債務を負ふが如きは、大に警戒を要するとの意見を有したり。然して英國に於ける預金銀行の發達は、十九世紀後半に至り特に長足の進歩をなし、遂に株式組織の銀行は、預金獲得競争に於て英蘭銀行を凌駕するに至れり。即ち千九百〇四年末の統計によれば、英蘭及ウェールズに於ける總ての株式組織銀行の有する預金額は六億四千二百二十八萬五千九百六十七磅に達せるに比し、英蘭銀行の保有高は僅に五千九百二十七萬四千七百五十九磅、即ち預金總額の十分の一に達せず。次に銀行券發行高の割合如何を見るに、總ての銀行の發行額二千九百三十六萬四千五百〇九磅の内、英蘭銀行の發行高は二千八百八十六萬八千七百九十磅の多額を占めたり。此の如くにして英國に於ける株式組織銀行の預金高は、其銀行券發行高に比して一千倍以上に達し、其金高は大英國全土に於ける銀行券流通總額に比するも尙二十倍以上に及びたり。(Conant, *The principles of Money and Banking* Vol. II. pp. 192-193)

轉じて北米合衆國の事情を探るに、預金の發達進歩は英國と同一の變遷をなせり。十九世紀の初期に於て米國銀行業は蘇格蘭に於けるが如く、預金事務よりは寧ろ其資本の貸出及銀行券發行を以て重要な營業となしたり。即ち南北戰

爭前に於ける州立銀行の營業統計は、次表の如くにして預金の如何に微々たるものなりしかを知らることを得。

年 度	貸付及割引額	資本金額	銀行券發行額	預金額
一八三四年	103,881,000 弗	19,396,820 弗	57,553,640 弗	5,356,330 弗
一八四四年	25,196,886	19,081,432	4,732,357	4,606,753
一八五四年	30,330,933	38,350,700	38,933,761	16,433,151
一八六一年	33,636,848	39,333,300	18,699,633	33,396,448

右表により檢するに米國州立銀行の預金額は、千八百四十四年に至り辛じて銀行券發行高に超過することを得たるも、此兩者の合計金高は尙資本金高に及ばざりき。然して此微々たる預金の勢力は、南北戰爭前後の年代に於ても、銀行券發行高に超過すること大ならず。之を資本金高に對比する時は遙に低位にありたり。然れば自然各行の貸出は公衆より預入れられたる預金を基礎とせず、専ら株金として拂込まれたる資本金より運用せられたり。然るに此の如き状態は幾許ならずして一變し、過古半世紀に至り米國々立銀行業は次の如き統計を示し急激なる發達をなせり。

年 度	貸付及割引額	資本金額	銀行券發行額	個人預金額
一八六五年	1,464,768 弗	15,686,840 弗	6,691,350 弗	18,496,650 弗

一八七五年	九五、八六二、五八〇	四四五、八〇二、四八一	三三、一九三、一五九	六二、八四六、六〇七
一八八五年	一、三三、四、三三六	五二四、〇九、〇六五	二〇、一九七、〇四三	九七、六四九、〇五五
一八九五年	一、九一、九三、二三三	六六六、七〇、四四五	二六、三七〇、七一一	一、六五、四八九、四八六
一九〇〇年	二、四九、八元、四四四	六〇六、七五、二六五	二四、九五、三五七	二、三〇、六〇、六六一
一九〇五年	三、七六、一六、〇六六	七六、九六、一四七	四四、四五、四三三	三、六二、四九、五九六

前記の表により當時米國に於ける預金額の増加は、銀行券發行額及資本金の増加に比して、如何に急激なりしかを知ることを得べし。然しながら千八百七十五年に於て、預金額は未だ資本金高に比して約五分の二倍にして、銀行券發行高に比して二倍の膨脹をなしたるに過ぎず。然るに千九百〇五年に至りては、預金高は資本金高の五倍弱にして、銀行券發行高に比して九倍弱の増加を示せり。又銀行貸出の側より觀る時は、千八百七十五年頃に於て割引及貸附に供せられしは主として資本金及銀行券により、其割合は全金額の八割五分以上を占めたり。然るに千九百〇五年に及びては、資本金及銀行券により行はれたる貸出は、僅に三割に止り殘餘の七割は公衆よりの預金より運用せられたり。

此の如く銀行資金の大部分は公衆預金によることとなりたれば、銀行業の性質は實質上變化せざる可らず。蓋千八百七十五年に於ては銀行資本金は、其大

部分を貸出に供せられたり。是當時に於ては預金及銀行券の準備金としては僅少の金高を有すれば足りたるを以てなり。然るに千九百〇五年に至りては之と事情を異にし、預金額及銀行券發行額の合計は、資本金の五倍以上に上りたるを以て、自然資本金は之等債務に對する保證資金に充當せられたり。是貸出は總て銀行に預託せられたる預金により供給せられたるに基因す。(Conant, The principles of Money and Banking Vol. I, pp. 193-194)

前述したる諸事情により觀察するに、社會に於ける商業取引幼稚なる時代に於ては、取引は殆現金拂なるを以て、銀行も主として資本金を以て主たる營業を行ひたりしが、一旦信用の發生となり公衆は徐に銀行券の作用及銀行制度の效益を認識し、從て銀行は次第に發展して更に預金制度の普及するに及び從來通貨及一時的資本の二重的職務を盡せし銀行券は、漸次其用途を失ひ、只信用取引によらざる小取引の代金支拂用として、世人の掌中に保有せらるゝに止る。此の如くにして預金及割引制度の發達に従ひ、社會に流通せる銀行券は増加することなくして漸次減退するに反し、銀行への當座預金高は貸付高と一致する程度に増加するものなり。

之を要するに銀行事務の未だ十分に發達せざる社會に於ては、銀行資金の大

部分は其資本金なり。然れば斯る社會に於ける銀行業は、貸金業と其揆を一にするも、其後金融上大なる活動をなさんが爲銀行は先づ自動的作用により、銀行券を發行し貸出を爲し、以て社會に交換の媒介物を供し、社會は亦銀行の發行せる銀行券を待ち經濟上の利益を享有せり。即銀行券の流通するに及び徐々に銀行信用を社會に公告し、日月の經過に従ひ正貨も銀行券も預託せられ自然多數人の協同行爲となり、預金は漸次吸取せられ之を基礎とし盛に貸出を行ひ其手取金を預金に振替へ之に對し小切手を振出さしむるを以て、社會の金融愈々圓滑となる。換言すれば人口稀薄にして充分に銀行の便益に浴せざる農業地に於ては、銀行券は尙信用の促進者となり預金銀行業の紹介普及を促しつゝあれども、人口稠密にして商工業の盛なる中心的市場にありては、銀行券は小賣取引上小切手を使用するに足らざる小額の支拂手段として其用を便じ、大取引には預金の利用を專にするものなれば、預金銀行の發達最迅速なるものにして、銀行資金中資本金よりなるものは、實に九牛の一毫に過ぎず。即信用形態の發展するに及び、資本金及準備金は營業資金たる性質次第に減退し、債務に對する保證資金たる性質増加し、預金は實に銀行資金の主要なる地位を占め、營業資金として大活躍を呈するに至るものなり。